

バングラデシュにおけるスラム居住者の貧困と脆弱性に関する分析

共生農業資源経済学講座 開発経済学分野
岡本英利

バングラデシュは世界でも最貧国の一つに数えられている。それは 1 人当たり所得水準が低いだけでなく、教育や健康など様々な面において観察することができる。国連が掲げる貧困削減の目標であるミレニアム開発目標に対して、2009 年のバングラデシュの中間報告を見ると、バングラデシュが定める貧困線以下の金額で生活する人々は全体の 39%を占めており、約 6000 万人が貧困状態にある (Bangladesh 2009)。他に、5 歳以下の低体重児は 45%、15~24 歳の成人識字率は 58%など、依然、貧困は大きな課題である。

一方で、このような貧困状態は国の中でも深刻度合が異なる。首都のあるダッカなど発展する都市部に対して、農村部は依然として低水準に留まっている。この都市部と農村部の格差は大きな問題を引き起こしている。その一つがスラム化である。都市部の高い所得機会を求めて農村部から労働力が移動してくるが、都市部は労働力の全てを吸収するだけの産業規模を有しているわけではない。また、農村出身者は基本的に教育水準が低く、職業訓練を受けていることも稀である。そのため、都市の仕事に就けずにあぶれた過剰労働者は低賃金だが参入退出の自由度が高いインフォーマルな仕事に従事することが多くなる。彼らは都市近郊にスラムを形成し、そこで生計を立てている。しかし、スラムは衛生状態が悪く下痢や伝染病などが発生しやすいため健康水準の低下を招く。また、スラム地域内では暴力や事件も度々起こる社会的に不安定な場所である。そのため、スラムで生活する人々は様々なリスクに晒される可能性が高く、世帯主が病気や怪我をすれば、世帯員全体の生活水準の低下へとつながる恐れがある。

近年、途上国における貧困の研究において、以上のようなリスクに晒される可能性やそれに伴う生活水準の低下などを考慮した「脆弱性」に関する研究が増えてきている。脆弱性とは「守るすべをもたず不安であり、リスクやショックやストレスに晒されていること」(Chambers 2006)。また、ミクロ経済学の視点からは「個人レベルの効用で計測した厚生水準で見て、それが将来低下する可能性」(黒崎 2009)としている。リスクに晒される可能性が高く、それが生活水準の低下につながる可能性も高いことが予想されるスラム居住者は脆弱性が高いと考えられる。

本研究の課題はバングラデシュにおけるスラム居住者の貧困と脆弱性の実態を明らかにすることにある。使用するデータは、国際食糧政策研究所 (IFPRI) が中心となり行ったスラム居住者の生活実態調査から得られたパネルデータである。対象はバングラデシュの北西部に位置するディナジプールのスラムで生活する世帯で、2002 年の 7 月から 2003 年の 9 月にかけて同じ世帯に対して 3 回にわたって調査を行っている。以上のデータから消費や所得に関する情報を用いてスラム居住者の貧困度合いを計測し、2 時点間での貧困の動態を明らかにする。また、将来の消費水準が低下する可能性である脆弱性を捉えるにあたっては、所得や消費のほかに食料安全保障や健康、安全に関するデータを使用し、スラム居住者がどのような面で脆弱であるのか明らかにする。